



## 北大の地域医療を支える試み

北海道大学医師会 理事  
核医学診療科（前・北海道大学大学院医学研究科長）

玉木 長良

崩壊の危機にある北海道での地域医療を支えるため、3大学が協力して地域医療支援策を検討してきました。札幌医大と旭川医大が入学に際して地域枠を設けたのに対して、北海道大学では、地域の基幹病院に指導医を派遣し、地域と大学病院とを循環する体制の構築を目指してきました。

具体的には平成20年から地域医療診療支援と地域医療の指導医を支援する4つのプロジェクトを立ち上げました。①医療人養成・地域医療支援プロジェクト、②医学部・大学病院の教育研究活性化及び地域・へき地医療支援人材の確保事業、③臨床指導医養成プロジェクト、④専門医派遣システム推進事業、がそれに対応します。北海道内には質の高い医療を提供している地域基幹病院、臨床研修指定病院が数多くあり、これらが診療及び教育研修の重要な拠点となっています。これらの病院に北大病院から若手医師や中堅医師、指導医を派遣することで、地域医療を重層的な診療体制、教育体制によって支えています。

卒業を前にした学生や研修医とは何度も意見交換しました。彼らの多くは道内での地域医療支援を前向きに考えてくれています。ただその病院にしっかりとした指導医がいて、教育体制が整っていることを選択の優先条件としているようです。一方で、若手医師は地域医療とは別に、高度医療技術の習得や医学研究、教育活動など、それぞれが考えるキャリアプランも持っています。上記の4つのプロジェクトは、若手医師のキャリアプランを考慮した多様性のある内容を備えており、ある者は継続して地域医療支援に当たり、ある者は一定期間で次の医師と交代して別のキャリアを進むことができます。すでに30名近い優秀な人材が地域基幹病院に従事し、地域医療に大きく貢献しています。今後さらに道民からの北大病院への信頼は高まるでしょう。他方、勤務した医師が安心、安全にその地域医療機関で過ごせることとともに、各自のキャリア形成にもつながらるシステムのさらなる改善をはかっていきたいものです。



## 病院情報 管理システムの更新

旭川医科大学医師会 理事  
旭川医科大学病院経営企画部 教授  
廣川 博之

旭川医科大学病院では、来年1月に新しい病院情報管理システムの稼働を予定しています。現在のシステムは、数年前にハードウェアを更新したり、医療安全面での機能を強化したりしているものの、導入して10年ほどになります。既に電子カルテを稼働させていますが、さまざまな理由から、電子カルテへの入力を主に看護師に限定し、医師は診療記録を紙カルテに記載しています。次期システムでは、まずこの変則的なカルテ記載を改め、医師の診療録を電子化し、電子カルテの本格運用を開始することとしています。また、システムを利用した医療安全をさらに推進させます。現在も、患者誤認や薬剤誤投与防止のため、患者IDカードや入院患者のリストバンドに付いているバーコードを利用した患者認証を行っています。それを強化し、さらにオーダー発行時の病名チェック、ハイリスク薬に関する警告なども次期システムで行う予定です。

患者認証機能は、患者誤認等の事例が生じ、それをシステムで予防する方策として考えられたという経緯があります。しかし、システムで予防する手段を講じても、その隙間を衝くように新たな事例が生じ、さらに強化するという、まさにいたちごっこの様相を呈しています。

ここで、ふと最近のJR北海道に関する報道が頭に浮かびました。このところ、JR北海道で特急列車などの火災などを含め、故障が相次いでいます。故障多発の原因として、列車の高速化、構造の複雑化などが考えられています。恐らく、定期点検時に、さまざまな機器などを用い、細部までチェックしているのでしょうけれど、それでも予防しきれいていません。もしかすると、床下の車軸やエンジン、バッテリーなどが粗悪になった、作業員の質が低下したのか、と疑いたくなります。乗客の安全を守るため、さらなる管理が必要です。

医療でも需要が質的、量的に増大し、医学知識や技術が高度化してきたために、避けるべき事例が生じる可能性があります。患者や医療者を守り、有らぬ疑いをかけられないためにも、病院情報管理システムにおける医療安全管理機能の強化を今後も積極的に推進する必要があると考えます。